

氏名（本籍）	イワ ナガ タダ スケ 岩 永 忠 輔（佐賀県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第209号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 TAKIJIRO 〈論文〉 景色
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 櫃 田 伸 也
（論文第1副査）	“ 准教授（ “ ） 布 施 英 利
（作品第1副査）	“ “ （ “ ） 小 山 穂 太 郎
（副査）	“ “ （ “ ） 大 西 博
（ “ ）	東 京 大 学 教 授 竹 内 整 一

（論文内容の要旨）

### 「海の月夜の星と日」

今日ぼくはひょんな事から外に出て  
人生でいくどか、もしかしたら  
たった一度だけあじわうことのある、  
最ももっとも、不思議で美しく、  
きもちのよい日にいる、  
海へやってきている  
船の音がする ひくい音、とおくで、  
波の音がする、ささやくようにやさしく  
オートバイにのって 島にいつのまにか  
まよいこんだひこうじょうのすぐそば  
いまひこうきが 目の前とんでった  
砂はまに月夜 はんぶんは光  
はんぶんは闇 半月、

360度 地平と水平  
無限のすなつぷ、無限の空  
天を見ながら砂の上にひらべたく  
ねころんで、真正面には空が  
空は何もへだてずに  
何もさえぎらずに  
すべてつつんで 私はつつまれて、  
どちらがどちらかわからない  
私はそらかもしれないと  
今思う 今だけはそうかもしれない

へだてる ものが無いのだ

風も音も水も波も  
星も月も砂も  
生き物の私  
もうあじわいつくしたのか  
ここに今起きた事は  
かつて見た事の無い景色  
二度と見る事の無いもの  
味わった事の無いやすらぎ  
このやさしさを あじわったから  
かこくさを否定することはできない  
あつくもないし さむくもない  
風はさわやか 心地いい  
波も船も風も、ざわめきも  
調和して今

流れ星 スピードで  
かけぬけて 流れた今、  
目をやるとその時  
地平と同じになって  
水平とおなじになって  
砂つぶとおなじになって  
卵の中に私はいる  
球体の中に私はいる  
母も父もなく 宇宙もなく  
つらぬかれている無数の糸に  
からだも魂も無数の糸に  
つらぬかれている

あやつり人形は繰り出す  
無数の糸によって、  
あやつる  
目に見えぬ糸、  
私たちにきよりはあって  
無のようなもの  
あたしの 内外はあって  
無のようなもの  
宇宙は広がっているというけれど  
今もなおひとつの点の  
ままであると思った

何もかもバラバラに

見えているけれど  
今なおひとつのものなのだ  
たった一人になる事があれば  
意識を人の社会にあわせず  
空や星にとけあったら  
何もかもは 外にあるものではない  
ひとつのものになる  
内と外はなくなる

今のこの空を見て  
思うのは目でものを見る事への  
ギモンだ  
さっかくにだまされて  
あたえられる 目ざわりのよさに  
まんぞくしては  
その先へいけない  
目で見える限界を思う  
考えれば考えるほど  
本当の事からとおのいていく  
本当は最初に見た  
はじめて見たそのとき  
すべてわかっている  
あとは忘れていくんだ

だからくりかえさなければ  
ならない  
けいけんは 終わらない  
常にわすれて うすまっていく、  
今のしゅんかん  
しゅんかんですらうそになる  
「今その場」に  
起きている事が  
たぶん回答  
はたらかせているイメージとは  
小さなていこうにすぎない  
つくりものの大きさだ

思いえがくめくるめくものたちは  
あそびのようだ  
この世を知ろうとするときは  
知ろうとすることを  
やめねばならない  
言葉をつくしてはならない  
言葉もイメージもない

きっと最初に見たときの  
トキメキの中に  
すべてある、

絵を目で見るだろうか  
そこにえがかれているものは  
見ているだけか？  
内部を見ているのだろうか  
絵は、目でかくのだろうか、  
かくときに起きている事は、  
もうまぐろ的な事ではないのだ  
もっと空間的な事がおきている  
交信的な事がおきている  
たとえば今あったこの空を

より味わう事のできる 行いだ  
絵をかくとき私は  
この空を目では見ないだろう  
むねの内にあるこの空は  
もうまぐろ的な空と  
交信をするだろう  
絵をかくときに  
何が起きているのかを  
考えたい

深いめいそうとも言える  
何かに向かう中で  
どこに向かうのか忘れ  
無指向性の  
イメージ  
景色そのものと出会ったり  
自我と出会ったり  
だれか、知らない人と  
出会う  
心のたびのようであり  
もうまぐろ的なものとの  
きんこうの保ちかたでもある

体のリズムとか  
自然との対話とか、  
無理なくひきうけつつも、  
はねかえす、  
「今」と、つきあわなければ  
絵がかけない

いつわれない  
我にとじこめられて  
いきばをなくした  
イメージを 景色から  
切り離そう  
出会いながら わかれていこう

かきながら さよならしていこう  
私は生きていれば  
無限に得ていること  
それはいき場をなくすだろう  
絵はかかれなければ  
ならない  
音楽はならなくて  
そういう事のために  
あるんじゃないか  
わたしは

時がたって  
波音は大きくなって  
しおが満ちてくる  
また  
月わずかにのぼり  
私はもうここを  
去らねばな  
もうここを去ろう